

## 脇本窯跡・大曲窯跡出土資料

関 明 恵

Relics Excavated from Wakimoto and Omagari Kiln

Seki Akie

## 1 はじめに

近年、鹿児島県下における近世磁器窯の調査・研究が進み、寛文7（1667）年に開窯され、磁器生産を試みた山元窯（加治木町）をはじめ、弥勒窯・日本山窯（加治木町）、重富山窯（始良町）、平佐大窯・新窯（川内市）など、18世紀後半から19世紀にかけての磁器窯の様相が解明されつつある。

今回筆者は、阿久根市教育委員会の御協力を得、昭和47（1972）年に池水寛治氏等により発掘調査された脇本窯の出土遺物と、水道工事により採集された大曲窯の遺物を実見する機会を得た。これらの遺物は薩摩の磁器生産の様相を知る上で貴重な資料である。そこで本稿では、脇本窯跡の出土資料の再検討と大曲窯跡出土資料の報告を行い、それらの特徴をまとめてみたい。

## 2 脇本窯跡

阿久根市脇本湯之浦字山 347 に所在する。『阿久根市誌』によると、昭和8（1933）年に湯之浦―大渡間の鉄道工事によって窯の中央部が分断され、消滅したものであると思われていた。しかし、阿久根市教育委員会が同窯の発掘調査を計画し、昭和47（1972）年3月に、同市の文化財審議委員であった池水寛治氏等によって発掘調査が行われている。

この窯については、安永年間（1772―1780）に川内平佐郷の郷士、今井儀右衛門が出水郡脇本に窯を創設して磁器の生産を志したが、資力が続かず失敗し、その後、天明6（1786）年平佐の領主、北郷家の家臣伊地知周右衛門の努力で北郷家の御用窯として再興、平佐山窯を創設した<sup>1</sup>とある。平佐山窯の創設時期についても諸説あり、脇本山窯の稼働時期については確定できていない。

## (1) 製品

池水氏等による調査においては、物原が未検出のため、製品の出土量は極めて少ない。このため多くが小片であり、図化可能な8点を掲載した。

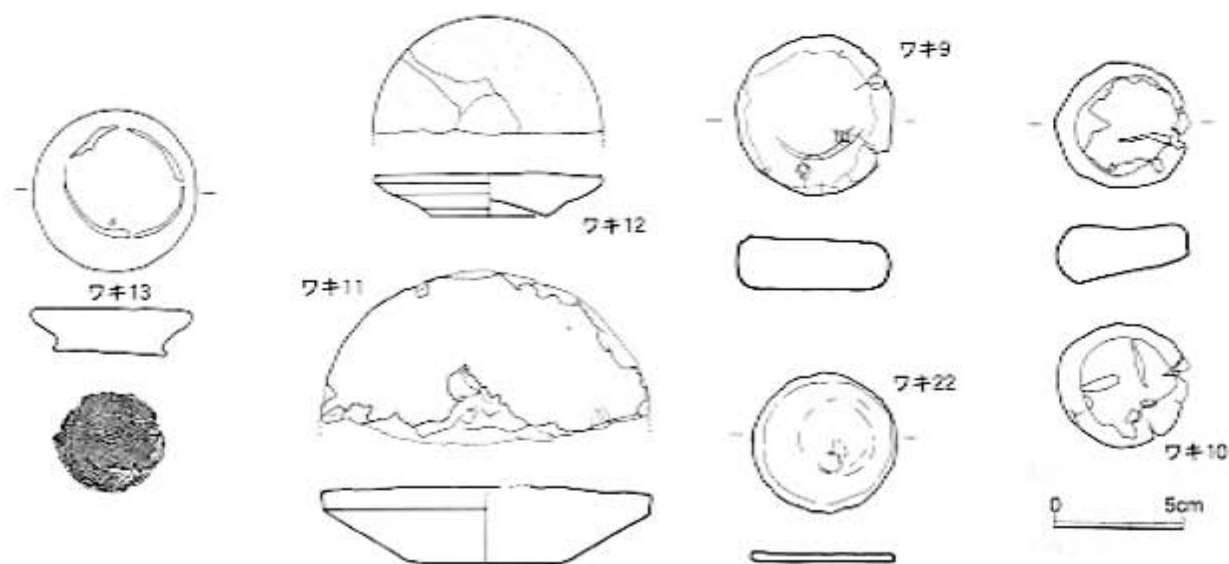
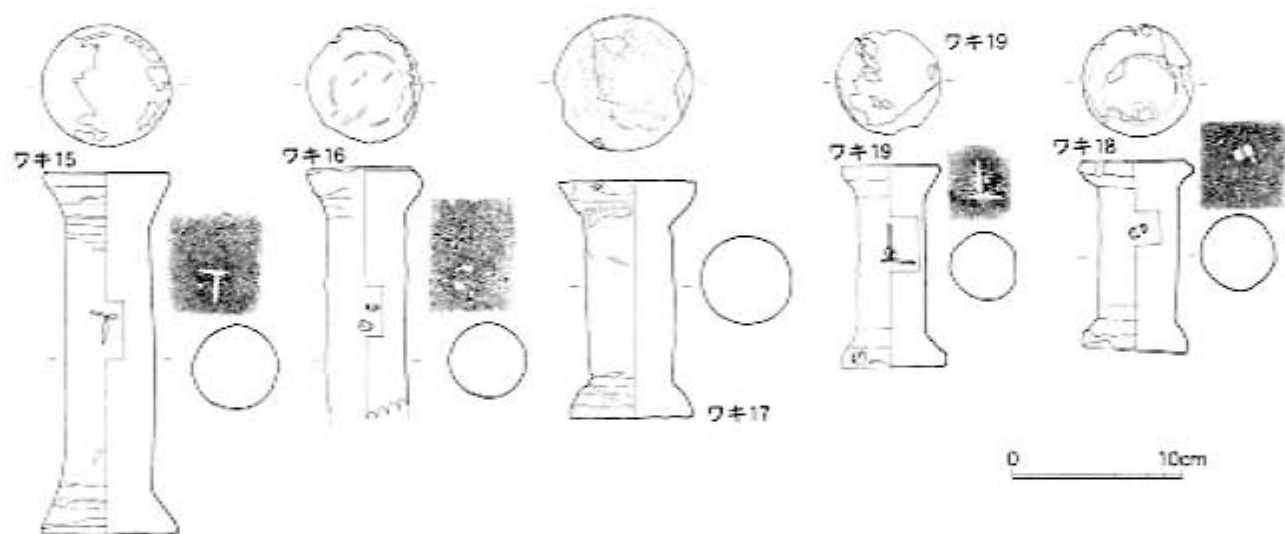
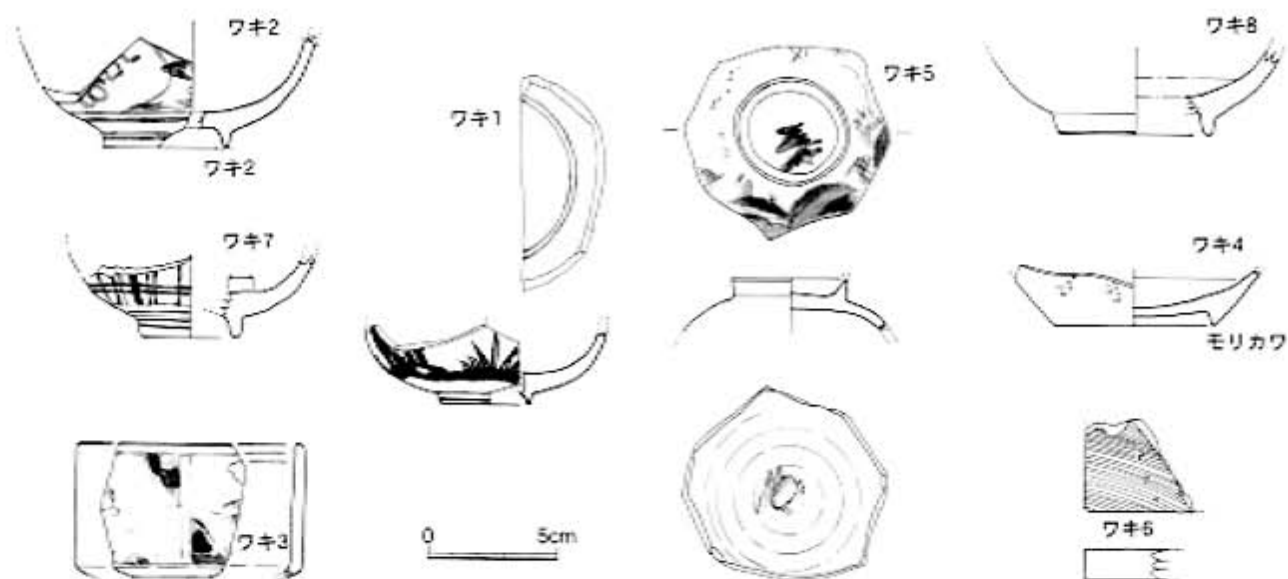
1～5は染付磁器である。1は内面に灰がかぶり、3・4は焼成不良であるため本窯の製品と考えられるが、そ

の他の資料については資料の特徴から本窯以外の可能性も否定できない。これらは、出土時の状況は不明であるが、一括の出土品として取り扱われていることから、一律に同様の資料として提示しておきたい。

1は区画に花文の描かれた碗である。2は外面格子文の染付碗である。やや灰色味を帯びた透明釉がかかり、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。3は外面に草文が描かれた碗である。焼成不良のため呉須の発色が悪く透明釉も溶けていない。『紀要出水』にも掲載されているが、今回実測図を修正して掲載した。5は外面に山水文が描かれた碗蓋である。つまみ部分がやや変形しているが、焼成は良好である。6はやや大型の碗で、内外面に貫入が看取され、内面には、蛇ノ目釉剥ぎが施される。7は外面のみ透明釉が施される。内面は露胎する袋物と思われる。8は用途不明の資料で、下面にはヘラ状工具による細かい刷毛目が残る。



第1図 遺跡の位置図



第2図 船本窯跡出土遺物

## (2) 窯道具

9～13はトチンである。鈍い褐色を呈し、白色粒子を多く含む陶製で、素焼きである。大(9・10)・中(11)・小(12・13)の3種類に分類でき、11を除き胴部には「T・()・・・A」の刻印が看取される。また10の上面にはセンベイが熔着しており、その上には製品の畳付きの痕跡が輪状に残っている。その他の資料についても、上面にセンベイを置いたと思われる白色の痕跡が見られる。

14～18はハマである。14～16は逆台形のもので、14・15は白色の磁製、16は茶褐色を呈する陶製である。14の下面は糸切りされており、上面には製品の畳付きの痕跡が残る。16は胎土に白色粒子を含む。17・18は円板形のハマで、胎土に白色粒子を含む陶製で、鈍い褐色を呈する。19は白色磁製のセンベイである。

## 3 大曲窯

阿久根市高松大曲に所在し、「阿久根皿山」とも称される。この窯については熊本窯と同時期に稼働していたもう一つの窯であるという伝承が残るのみで、郷土誌等にも掲載されておらず、その存在は不明であった。昭和31(1956)年、森高盛氏の発掘によりその存在が明らかになり、同年8月8日付けの南日本新聞に『阿久根皿山を発見』という見出しで掲載された。また、昭和51(1976)年には、阿久根市立図書館長浜之上訓衛郎氏等により、再度その位置が確認されている。窯の創設については、天草の上田家文書『上田宜珍日記』の文化15(1818)年6月26日の記録に、「近來、皿山仕立て候につき」と

いう内容が記録されている<sup>2)</sup>ことから、この時期と考えられる。

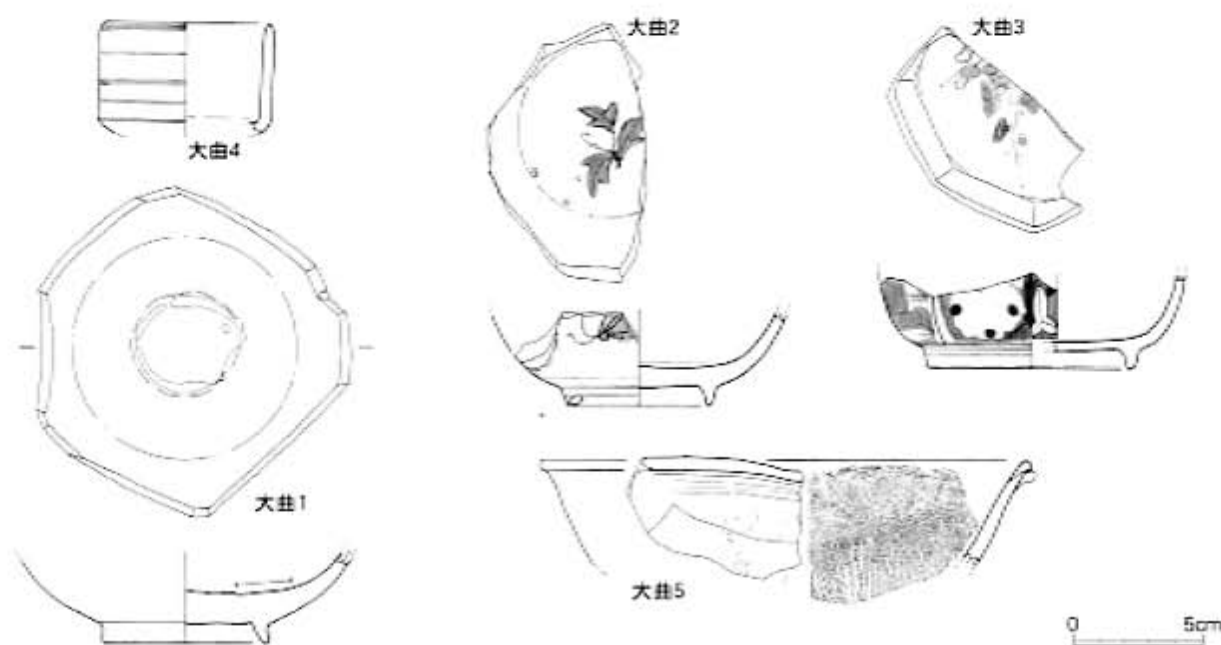
## (1) 製品

水道工事中に8点の資料が採集されている。そのうち1点は陶製の土瓶の把手部で、苗代川焼と思われるが、他は焼け歪みや灰かぶり、窯傷等がみられる磁器であるため、本窯の製品と考えられる。図化可能な5点を掲載した。

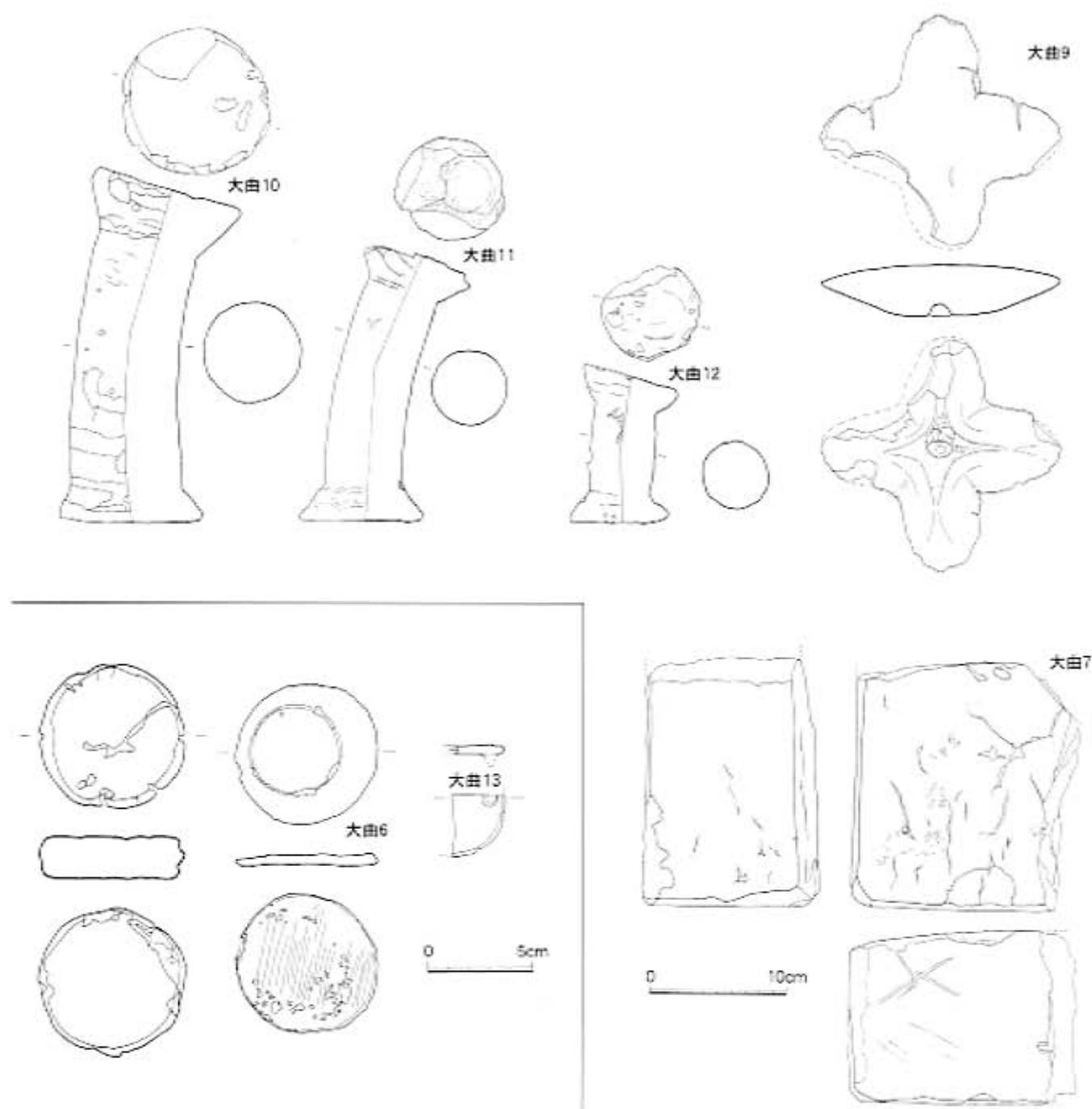
20は筒形の染付碗である。白色の緻密な胎土に透明釉が掛かる。外面には横線文が描かれる。21～23は鉢で、21・23は染付、22は白磁である。いずれも白色の緻密な胎土で、透明釉がかかる。20・21は焼成良好で、透明度も高く光沢のある仕上がりであるが、22は素地が隠れるほど厚く施釉され、やや黄緑がかった発色を呈する。また、21は見込みに草文、外面は欠損して不明であるが室文の一部と思われる文様が描かれている。内外面とも体部に貫入が看取される。22は体部が八角形の鉢である。見込みには草花文が描かれ、外面は2面ずつ4つに区画し、その中に文様を描いている。22は底部がやや厚手で、内底面に巾約2cmほどの幅広の蛇ノ目軸刺ぎが施される。24は小型の摺鉢である。内外面とも口縁部上位のみ透明釉がかけられ、スリ目部分は露胎である。また、施釉部分には貫入が入り、外面は白濁している。

## (2) 窯道具

25～27はトチンである。胎土に細かい白色粒子を多く含む、素焼きの陶製である。内面は黒褐色、外面は自然釉がかかり、暗褐色を呈する。焼成時の高熱のため、焼け歪みが見られる。大・中・小の3種に分類できる。25は大形のもので、上面と下面の両面にセンベイの痕跡が



第3図 大曲窯跡出土遺物(1)



第4図 大曲窯跡出土遺物(2)

白く残る。26は中形のもので、上面にはセンペイの一部が熔着し、下面には白色の痕跡が見られる。27は小形のもので、これも両面にセンペイの痕跡が看取される。28は円板形のハマである。陶製で、粘土には細かい白色粒子を多く含み、黄褐色を呈する。29はセンペイで、磁製である。両面に製品の提付の痕跡が輪状に残り、片面にはセンペイ製作時に、ヘラ状工具でなでたとと思われる痕跡も看取される。30は御付ハマと思われる。ほとんど欠損しているが、センペイに貼り付けた御部分が僅かに観察できる。31は十字形トチンまたはタコハマと呼ばれる資料である。布を敷いた型に粘土を流し込んで作ったと

考えられ、全体に布目が残る。下面中央には巾約1.3cm、深さ約1cmのくぼみが作られ、上面は焼け歪みのため、反部がやや下方に反っている。32は窯壁である。下面はあまり火を受けておらず、赤褐色を呈するが、他の面は黒褐色で、灰が熔着している。

#### 4 まとめ

臨本窯・大曲窯の製品・窯道具について、若干ではあるが気付いた点をまとめておきたい。

##### (1) 臨本窯

製品の胎土は、目立った混入粒子もなく緻密であるが、

焼成不良の資料はやや焼きしまりが悪くぼさついた感じを受ける。色調は基本的に白色を呈するが、焼成不良の資料については、やや灰色味または黄色味を帯びる。資料の絶対量が少ないため、この窯の製品の特徴をつかむことは難しいが、丸形の茶飲み碗になるものと思われる<sup>3)</sup>資料3が、小片ではあるが他に数点確認されており、これらが全て焼成不良であることから、脇本窯の製品を探る上での手がかりになるものと思われる。

窯道具については、トチンの胴部に刻印が記されている。池水氏は『阿久根市誌』の中で「胴部にT・○・ハ・:・○の五種類の窯印があるものと無印のものがあり、○印のものは小形で数も少ない。」と述べ、その後『紀要出水』ではさらに「▲・ハ」が追加された種類の窯印が確認されたと報告している。今回の再検討では「T・○・ハ」と「印なし」の4種類しか確認できなかった。大形のトチンは「T」が最も多く、逆に小形のトチンでは「T」は1個体しか確認できず、「印なし」が16個体であった。

また、池水氏のいう「(○・:)」の刻印については、先端を加工した竹管状の工具で刻印されたものと思われ、刻印の形状に多少の差は認められるものの、刻印時の加減の程度によるものと思われ、同一種の刻印と考えられる。(表1・第5図参照)この刻印の性格について池水氏は『阿久根市誌』で「普通このようなトチンの窯印は所有者を示すものと考えられ、この窯がただ一人によって焼かれたのではなく、共同窯的性格のものではなかったか、このトチンの在り方について、今後検討されなければならない」と指摘し、その後報告された『紀要出水』の中では、「個人所有を示す窯印にしては種類が多すぎる。恐らく他の窯からの移入と考えられ、寄せ集めの観が強い。」と述べている。

今回の再検討の結果からは、種類が多すぎる無秩な他窯からの流入品というよりも、秩序の認められる個人所有を表すマークであり、この窯が共同窯であったことを示すものであると考えた方が妥当であろう。従来言われてきたように、脇本窯閉窯後、工人たちも北郷窯に移ったとする文献によるならば、北郷窯でも同様の刻印が刻まれた窯道具が存在する可能性も考えられる。トチンの刻印は脇本窯と北郷窯のつながりを考える上で、興味深い資料である。その他、窯道具の中で、センペイが新たに確認された。トチンと製品の間で挟んで使用する磁製の円板形の窯道具で、直径6cm前後の大きさのものがほとんどであり、極端に大形のものや小形のものは見られない。

## (2) 大曲窯

大曲窯の製品については、焼成良好で、胎土は白色を呈し、緻密である。透明釉も透明度が高く光沢もある。資料23に見られるように蛇ノ目刷ぎの技法も行われ

ていたようである。24のような磁製の小形の描鉢も作られており、大曲窯の製品の特徴を知る上で興味を引く資料である。また、今回借用した資料には確認できなかったが、浜之上氏等による昭和51(1976)年の分布調査の際確認した遺物には、高台内面に「松葉文」が呉須で描かれたものが目立ったという。<sup>4)</sup>

窯道具については、脇本窯に見られない御付きハマ・タコハマの存在が注目される。窯の稼働時期に言及する上で、貴重な資料である。また、この窯のトチンには刻印等の印は認められない。

## (3) 両窯の稼働期間について

最後に両窯の稼働時期について若干ふれておきたい。

まず、大曲窯についてであるが、昭和31(1956)年の新聞記事に掲載された写真中にタコハマが写っており、この資料から関一之氏は「この窯道具が薩摩焼の窯跡で見られるのは、南京皿山や平佐大窯・新窯、日本山窯等で確認している。」と述べ、『三国名勝図会』にこの窯の記録が見られないことから、「文化15(1818)年から19世紀中頃、約140年間」と想定している(関2001)。タコハマの存在だけで稼働期間を想定することは将来的には是正して行かねばならない要素であろうが、現在の限られた資料や研究レベルでは一つのたたき台として参考にしたい。

また、この見地から脇本窯を視れば、少量の出土資料ではあるが、タコハマが確認されていないことは、タコハマという道具が廃れた時期の窯ではなく、タコハマが普及する以前の窯と考えることが妥当であり、さらに、本稿で紹介した資料3のような丸形の茶飲み碗の年代等から、従来の年代観である安永年間(1772~1780)と考えたい。

## 5 おわりに

以上、脇本窯・大曲窯の出土遺物の資料化とその特徴をまとめてみたが、資料の絶対量が乏しいため、不明な点も数多くその特徴を明確にするまでには至っていない。しかしながら、これらの資料が薩摩における近世磁器窯の様相を知る上で貴重なものであることは確かである。

なお、本稿作成にあたって、阿久根市教育委員会には貴重な資料の提供を快く承諾していただいた。最後ではあるが、感謝の意を表したい。また、本稿掲載の資料は阿久根市教育委員会が所蔵する。

## 【註】

- 1 遺跡発掘 事務所 工務局編 1896『府縣陶器沿革調査工務統計』第2所編 平 2000.3.4 第7回鹿児島陶磁器研究会シンポジウム「薩摩皿山の記録」
- 2 大橋康二氏(九州陶磁文化館)の御教示による。
- 3 浜之上訓一郎氏の御教示による。

## 【参考文献】

- 阿久根市誌編さん委員会 1974『阿久根市誌』  
池水龍治 1979『阿久根市脇本窯』『紀要出水』1 鹿児島県立出水高等学校  
関一之 2001『阿久根皿山について』『からから』9

表1 臨本窯跡出土のトチンに印された刻印の種類別数量

	印なし	T	()	Λ	計
大形	6	11	6	2	25
中形	4	0	0	0	4
小形	16	1	12	0	29
計	26	12	18	2	58

表2 臨本窯跡出土遺物観察表

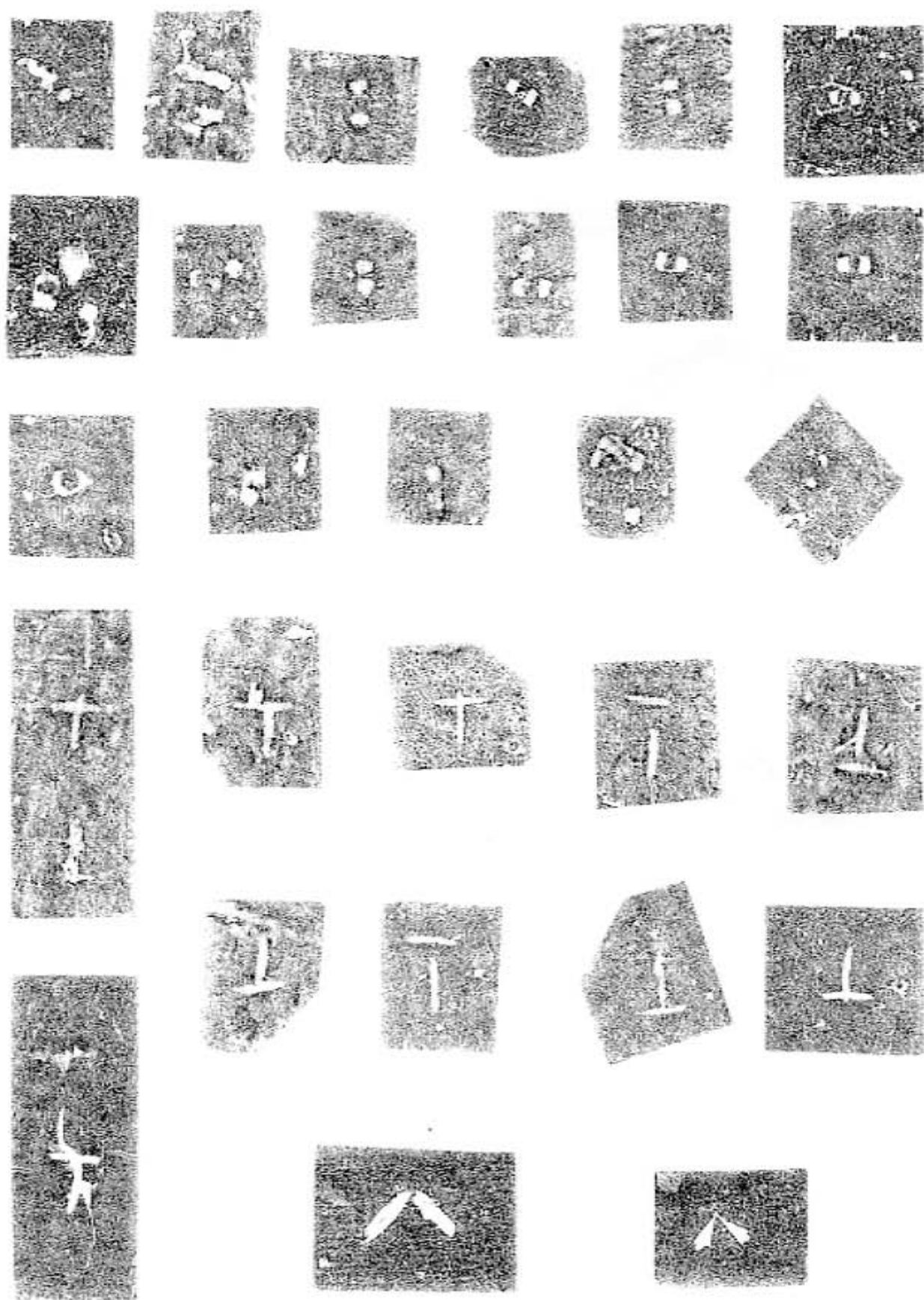
No.	種類	器種	出土地点	法量 (cm)			備考
				口径	底径	器高	
1	磁器	碗	臨本窯 B3	-	5.0	-	染付 透明釉
2	磁器	碗	臨本窯 A1	-	3.8	-	染付 透明釉
3	磁器	碗	臨本窯 A1	-	5.6	-	染付 透明釉 焼成不良
4	磁器	碗	臨本窯	8.8	-	-	染付 透明釉
5	磁器	蓋	臨本窯 A1	つまみ径5.8		-	染付 透明釉 焼成不良
6	磁器	碗	臨本窯 A1	-	6.0	-	白磁 透明釉
7	磁器	袋物	臨本窯焚口	6.3	-	-	白磁 透明釉
8	磁器	?	臨本窯 A1	厚さ1.2		-	白磁 透明釉

No.	種類	器種	出土地点	法量 (cm)			備考
				上面径	口径・胴部径	器高・厚さ	
9	窯道具	トチン	臨本窯	7.5	5.2	21.8	陶製
10	窯道具	トチン	臨本窯	6.8	4.5	-	陶製
11	窯道具	トチン	臨本窯	-	5.3	14.2	陶製
12	窯道具	トチン	臨本窯	6.1	4.0	12.0	陶製
13	窯道具	トチン	臨本窯	6.5	4.4	11.1	陶製
14	窯道具	ハマ	臨本窯 B3	6.5	4.5	2.0	陶製
15	窯道具	ハマ	臨本窯	8.0	4.4	2.0	陶製
16	窯道具	ハマ	臨本窯	13.0	6.0	3.0	陶製
17	窯道具	ハマ	臨本窯	6.3	-	2.0	陶製
18	窯道具	ハマ	臨本窯	5.1	-	1.8	陶製
19	窯道具	センバイ	臨本窯	5.7	-	0.4	陶製

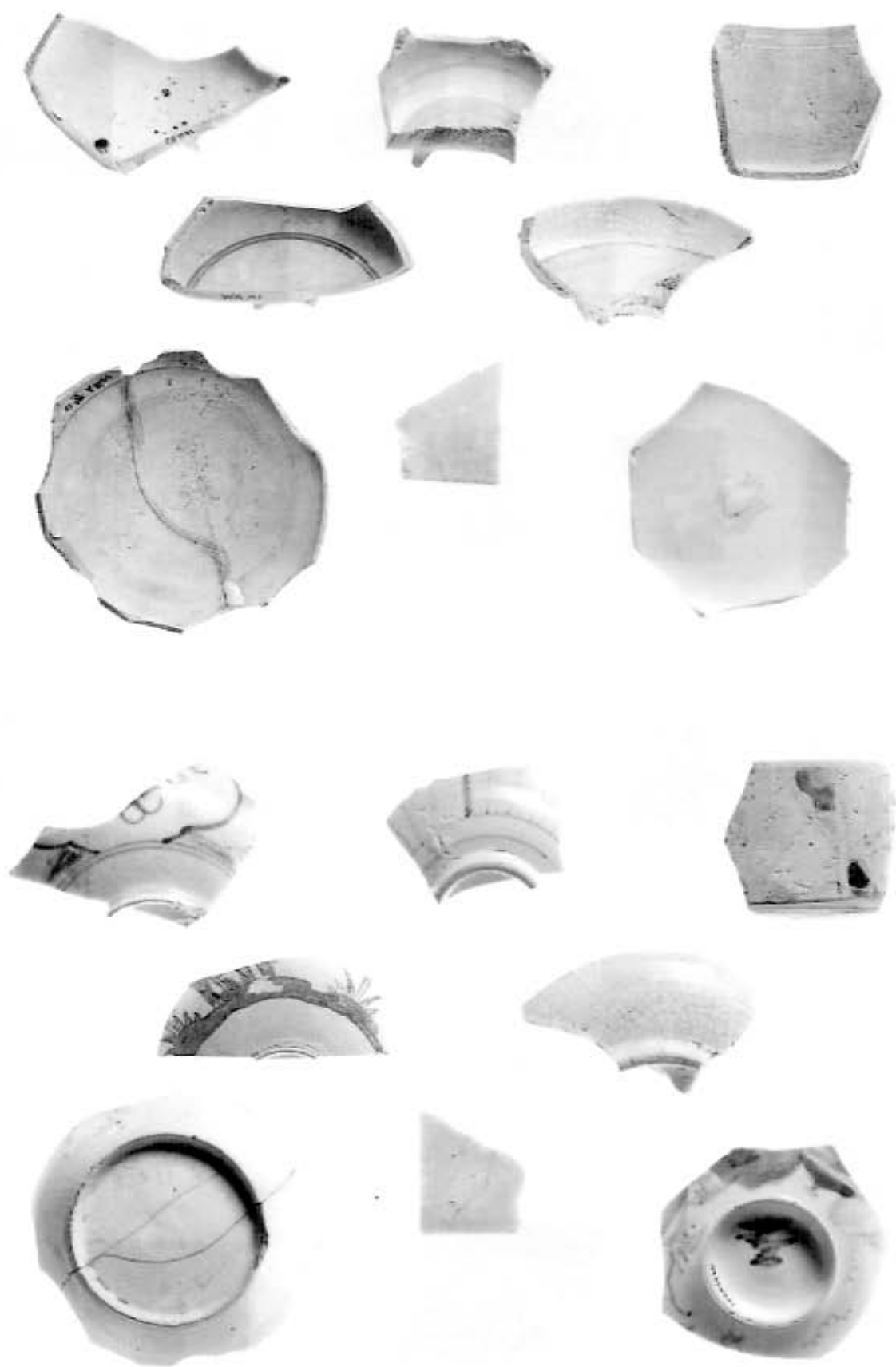
表3 大曲窯跡出土遺物観察表

No.	種類	器種	出土地点	法量 (cm)			備考
				上面径	口径・胴部径	器高・厚さ	
20	磁器	碗	大曲窯	6.4	-	-	染付 透明釉
21	磁器	鉢	大曲窯	-	5.7	-	染付 透明釉
22	磁器	鉢	大曲窯	-	8.0	-	染付 透明釉
23	磁器	鉢	大曲窯	-	6.5	-	蛇ノ目釉剥ぎ 透明釉
24	磁器	搦鉢	大曲窯	(19.4)	-	-	透明釉

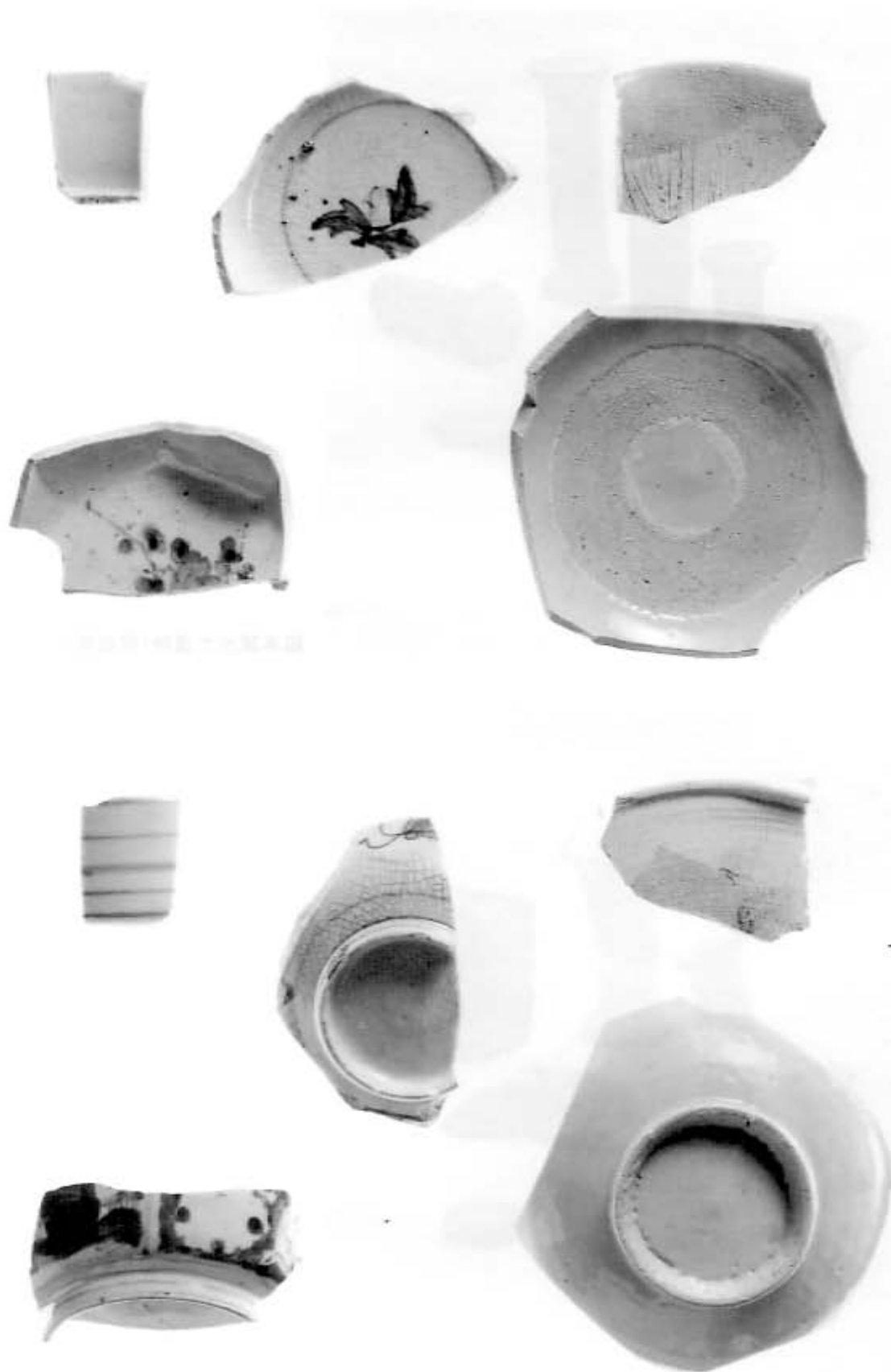
No.	種類	器種	出土地点	法量 (cm)			備考
				上面径	口径・胴部径	器高・厚さ	
26	窯道具	トチン	大曲窯	10.0	7.2	(24.7)	陶製
27	窯道具	トチン	大曲窯	7.1	5.5	(20.0)	陶製
28	窯道具	トチン	大曲窯	7.2	4.8	(11.0)	陶製
29	窯道具	ハマ	大曲窯	7.4	-	2.0	陶製
30	窯道具	センバイ	大曲窯	7.0	-	0.5	磁製
31	窯道具	脚付ハマ	大曲窯	-	-	0.4	磁製
32	窯道具	タコハマ	大曲窯	17.5	5.5	3.8	陶製
33	窯道具	窯壁	大曲窯	-	-	11.8	陶製



第5図 阪本築跡トチンに印された刻印



阪本系跡出土遺物



大曲窯(神奈川)出土遺物

大曲窯跡出土遺物(製品)



総本窯出土遺物(窯道具)



総本窯出土遺物(窯道具)